

婚外結婚・丹羽文雄



婚 外 結 婚

一九六九年二月一五日 印刷
一九六九年二月二〇日 発行

定価六〇〇円

著 者 丹 羽 文 雄

発行者 佐 藤 亮 一

発行所 株式会社 新潮 社

郵便番号 一六二

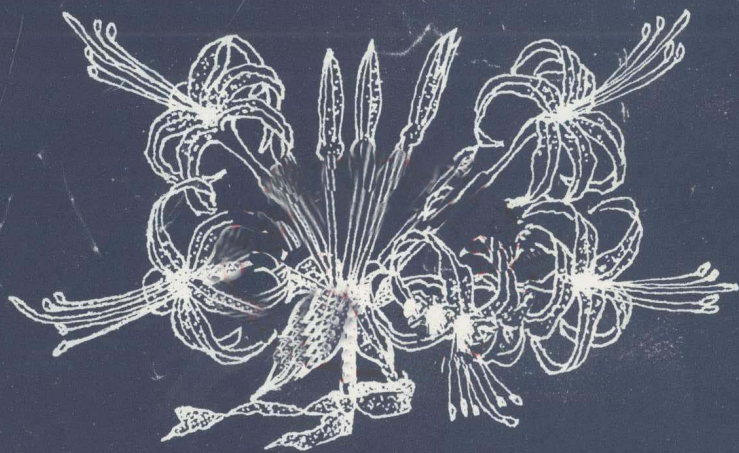
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(260)一一一番(大代)

振替 東京八〇八番

印刷 株式会社 金羊社
製本 大口製本所

(落丁本は本社またはお買求めの書店でとりかえます。)

婚外結婚・丹羽文雄



新潮社版

目

次

婚
外
結
婚

ひとりだけの花嫁

名古屋駅についたのが、かなり夜更けであった。十二月の初めである。桑子は小さいトランクを下げ、ショールをかけ、コートは着ていなかった。ま新しい足袋という出で立ちでもなかった。風が吹いていた。吹きぬけの駅の歩廊は、どこよりも風が強いようであった。額に垂れた髪をかきあげながら、掲示板を見て歩き出したが、行先の確定していない旅行者のようであった。階段を下りる桑子を、降車客が追い越した。はじめて下りた駅のせいもあり、はきはきとふるまえなかった。ためらい勝ちな、いかにも自信のない歩き方は、桑子の心の中をそのままあらわしていた。

改札口を出たが、しばらくとまどっていた。ここは乗車口と降車口がはなれていた。乗車口の方にまわると、桑子は時間表の下に立った。桑子は腕時計をしていなかった。

あたりの掲示板をながめた。そんなようすが、おいてきぼりをくらったひとのように、何となくひと目についた。家出娘のようであった。

「四日市にいくのには、どこで乗るのですか」

駅員をとらえると、桑子は訊いた。

「汽車ですか、電車ですか」

駅員は事務的に訊きかえした。桑子は苦笑した。用意のなかった質問であった。

「どちらでもかまわないのです」

「この時間では、電車の方が早いでしょう」

と、駅員は売店のある通路の方を指差した。桑子がはなれた。トランクを下げた、一米六六ほどの、撫肩の和服の女客を駅員は見送った。二十一、二歳だった。きものが地味すぎた。羽織は象牙色の無地であったが、その年齢にしては、似合わない色であった。ふだん着というのではないが、きものも羽織も帯も、年齢に合わせてつくったものでなく、たれかにももらったものの寄せ集めといった感じであった。トランクも相当に使われたものらしい。

桑子は近鉄の始発駅のある地下道に下りた。桑子から二、三間おくれて、五十年配の小柄な男が、桑子から目をはなさずについていた。その男は、桑子が駅員に訊ねているとき、すぐうしろに立っていた。

切符を買って改札口を出るとき、桑子は四日市方面の電車かと駅員にたしかめた。五十男は桑子のすぐうしろにいた。あまいような口の利き方が印象的であった。

電車にのりこむと、桑子のそばに小柄な五十年配の男が腰をかけた。二人がけの座席であった。電車が動き出した。地下鉄のようだと桑子は思ったが、この電車は地下から動き出して、やがて地上に出るのだった。

地上に出たとき、電車の騒音が足の下にかいくぐり、一括

されたようにきこえた。しばらくのあいだ、窓の外のようによくわからなかった。窓に近い灯は目にとまらなかったが、遠くに見える灯が動かないようにみえた。桑子は、窓ガラスに顔がうつっているのに気がついた。左手で額の髪をかきあげた。青白いほどの肌をしていた。指がながく、形がよかった。爪の形もよかった。娘らしく指のつけ根にえくぼが出来るのがふさわしかったが、出来ない体質の方であった。頸が細かった。が、眉やまつ毛や髪は濃い方であった。隣席の男は、桑子が左手で髪をかきあげた時、娘のわりに腕の毛が濃いのを見のがさなかった。

——腺病質かな。

男は話しかけるきつかけを待った。桑子は目をあけていたが、自分の心の中を見つめているような顔つきだった。その目は何も見ていなかった。が、ときどき窓の外を見たら、遠い灯をみると、心の中の焦点と遠い灯がひとつになるような気がした。おのれの運命を遠い灯に見たてゐるのか。桑子は隣席の男に注意をはらわなかった。旅に出て、見知らぬ同乗者に用心をすることをわすれているようであった。そのためかえて五十男は、話しかける隙が見あたらなかったようである。

揖斐川の鉄橋をわたっているときであった。

「どちらまで……？」

何気なく男が訊いた。桑子はゆっくり五十男の方に顔を向けた。

「四日市までまいります」

「四日市ですか」

五十男は知っていたのである。男には、桑子の使い古したトランクや、ちぐはぐなきもののようなすから、ぼんやりした表情から、どういう立場におかれた女か、一応常識的にも想像されるらしかった。

「東京の方ですね」

「はい」

話しかけてきた見知らぬ男に、とくに用心をするふうもなかった。気味が悪いとも思わなかった。会話はそれで切れた。桑子は窓の外を見た。

電車は勢いづいて闇の中を疾走した。電車が三滝川の鉄橋をわたった。そこからいくらか速度が落ちて、やがて四日市駅の構内にはいった。男はちょっと頭を下げて、立ち上った。その車輦から下りたのが、桑子がいちばん後であった。

改札口を出た桑子は、また時間表の下に立った。降車客はすくなく、たちまち構内はがらんとした。夜の更けている感がつよかった。売店はしまっていた。待合室の長椅子が背中合せに三、四組あった。乗客とは思えない男が、椅子の上であぐらをかいていた。横になっている男もあった。いずれもみすばらしい身なりであった。

「菰野にいく電車は、もうないでしょうか」

桑子は小荷物扱いのところ、若い駅員に訊いた。

「明日の朝までないですよ」

桑子はトランクを下げて、時間表の下に立った。何度見あげてもおなじことであつた。途方にくれた。そのようすを待合室の外から、小柄な五十男がながめていた。男には桑子の行動が気になるらしかった。いったん構内を出たが、途中から引きかえしてきた。四日市市内に行く先があるのなら、とくに若い女はいなくなっているはずである。若い女がひとり、待合室にとりのこされている。

やがて桑子は、待合室の長椅子にかけた。いかにも行くあてのないひとのように見えた。トランクを膝にのせて、その上に肘をつけて、床に視線を落した。その格好で駅で夜あかしをするつもりだろうか。男は待合室に入っているうとした。が、思いとどまつた。若い女が駅の待合室で、ひと晩をおくるといふだけでも、異様なことであつた。幸いこの待合室は二十四時間開放されていた。不審訊問を受けるのは、必至であつた。悪い奴がいい寄つて来るかも知れなかつた。五十男は迷つた。自分とあの娘は、赤の他人である。親切心から声をかけても、悪い奴と誤解されないともかぎらなかつた。疑われ、危険視されて、そのあげくことわられては、ひっこみがつかなくなるのがおちである。五十男は長椅子を今夜のねぐらとかまえている浮浪者をながめやつた。そんな雰囲気の中に、若い女をひとりおいておくわけにいかなくかつた。男はあやしまれるほどの時間をかけて、待合室のガラス戸越しに桑子をながめていた。若い女が待合室の入口にあらわれてくれたなら、案外自然に声がかけられるかも知れなかつた。電車の中の隣の

客の顔をおぼえているであらう。男は、その機会を待った。が、若い女は動かなかつた。

五十男はあきらめた。ふりかえりながら駅をはなれた。親切心はあつても、それが強くはなかつたのだ。誤解をおそれないほどの果斷さに欠けていた。桑子は自分が見知らぬ第三者に関心を持たれていることに気がつかなかつた。

東京を發つまでに十分調べておけば、途中の駅の待合室で、途方にくれることもなかつた。が、汽車の時間表を買つて来て、調べているひまがなかつた。桑子のまわりに、時間を調べてくれるものもいながかつた。調べようと思えば、出来たかもしれないが、氣持の上にそれだけのゆとりもなかつた。

鳥が發つような旅立ちであつた。予定がたてられなかつたのは、いつも桑子がそうした状態におかれていたせいだつた。桑子は、何ごととも自主的にふるまへなかつた。家族に向つて自己を主張したことがなかつた。二十一歳の今まで、桑子はそういう環境におかれていた。

目白台に、水尾祐正の家庭があつた。そこから桑子は小学校に通い、中学、高校を卒業した。卒業したといつては、姉のきげんをそこねてしまふ。卒業させてもらつたというべきであつた。

「桑子は、私のたったひとりの妹だなんて大きな顔をするんじゃないよ。私が両親の代りをつとめたんだからね。中学でやめさせてもよかつたのを、高校まで出してやつたん

だよ。ありがたいと思わねば罰があたるよ」

と、たか子は口癖のようにいった。

「お菊さんはお手伝いだから、ちゃんと給料をはらってるけど、桑子にはお小遣をやる必要はないんだよ。ほしければ、うちのものを何でも使つてよいのだから。お金のほしい時には、そういえばいいのさ」

きものも服も、たか子のお古であった。たか子は、自分がくれたものをいちいち克明におぼえていた。

桑子には、学校時代から自分の部屋というものがなかった。八十五坪の二階建て、庭もかなりあった。女中部屋と隣り合った六畳の納戸が、桑子の寝間であった。納戸には簞笥やミシン台や衣桁があるので、せまかった。寝間に使用しているが、寝間らしい匂いを感じてはならなかった。幸い桑子は体臭がうすい方であった。

極彩色の地獄絵をみたあるひとが、阿鼻叫喚の亡者の悲惨なさまを馴れあいっこだと評した。亡者は苦しみで馴れて、むしろ秩序を保つために苦しみのそぶりを示しているようだった。地獄絵の制作の意図はそういうところにはないはずだった。最初の手術より二度目はこたえる。

二度目より三度目はこたえるものである。人間の心理や感覚はそういうふうに出てくる。亡者が一万六千年もながいあいだおなじ苦しみを受けるというの、馴れるどころか、そのたびに苦しみが新たになるのだった。

小さいころから、姉の毒舌には馴らされてきたが、桑子は年ごろになるにつれて、姉の毒舌が身にこたえるように

なつた。毒舌に抵抗する要素が、自分の内にいつかつちかわれていた。

その朝の食事のとき、桑子は、

「菰野の太友さんからは是非私に来てほしいといつて来ました。一身上の問題で、私がいかなければ解決がつかないことになっているのです」

義兄の水尾も、たか子も、とっさにその意味をはかりかねる顔付になった。水尾が眼鏡ごしに、

「三重県の菰野にいくというのだね」

「桑子がひとりで行くのか？」

「はい」

大友武は、水尾祐正の大学の後輩であった。学生の間から、水尾家に入社していた。国立の大学を出てから、ある生命保険に入社したが、独身寮にはいり、昔のように水尾家に入社していた。大友家の長男というので、田舎の両親は結婚をいそいでいた。そのことは水尾夫妻も聞いていた。かえりたがらない大友だったが、気が弱くて、とうとう職をやめ、東京をはなれた。

「一身上の問題というのと、太友さんの結婚問題？ それに桑子が何か重大な発言権をもっているというの？」

そういつている内に、たか子の表情がたかくなつた。桑子は、それを覚悟していた。感情的になると、姉の目尻が吊りあがるようになった。

「いつの間にか桑子は太友さんと、そんな関係になつてた

の」

「関係だなんて……」

姉の自尊心を傷つけたのは、あきらかであった。姉がこの問題にまともに相談にのってくれないことははじめからわかっていた。

水尾家は、客が多かった。水尾は印刷会社に勤めていた。四十三歳のかれは、やがて部長に昇進するはずであった。会社の同僚があそびにきた。同僚の細君が子供をつれてやってきた。水尾の大学の後輩がきた。大友武は自分の友達をつれてきた。たか子の同級生の加茂香苗も、そのひとりであった。ある製薬会社の宣伝部員をつとめている三崎徹も、仲間であった。水尾夫妻はそろって、客好きであった。たか子は陽気であり、親切であり、客に差別をつけず、歓迎した。子供のない夫婦は、そんなことで何かを補っているのかも知れなかった。以前は、水尾の大学時代の友達の仲代宏も常連であった。近ごろは仕事が忙しいとみえて、顔を出さなかった。集まる常連にとって、地域的にも目白は足場がよかったようである。みんなには、気のおけない、愉しい場所であった。水尾家では、いつもたか子を中心であった。たか子は、三十二歳であった。美貌であり、色が白くて、どこか男のようなところがあった。骨太で、大柄のせいだろうか。桑子とは、十一歳もちがった。たか子は、わが家に集まってくる男たちは、すべて自分に好意以上の感情をよせていると思ひこんでいた。

大友はたか子より六つ年下であったが、水尾の後輩というのは口実にすぎず、常連となっているのは、おのれの魅力のせいだとたか子は信じていた。水尾家では、桑子の存在がうすかった。みんなが談笑したり、のみ食いしている席に桑子が同席することはすくなかった。桑子には台所と座敷を往復する任務があった。

花にあつまる蜜蜂の一匹が、気紛れから別の花にとまっただようにたか子は桑子の話をきいた。自尊心が傷つけられたのに、がまんがならない。

「私たちの目をぬすんで、いつの間にか、お前たちはそんなことをしてたのね」

「手紙のやりとりをしていて、大友君のようすは大体わかってのだらうね」

義兄がつづけていったが、たか子のような感情的ではなかった。

「はい」

「その手紙をみんな、ここへもっておいで」

と、姉が命令した。

桑子が納戸で大友の数通の手紙を紙函かみだてから取り出してるとき、

「いまどきの若いものには、目がはなせないわ。何をするかわからないんだもの」

姉の声がきこえた。水尾はだまっていた。

姉がこわい顔をして、一通ずつ読んだ。たれに読まれて

も、大して迷惑はうけない手紙の内容であった。大友には、許婚者があつた。が、許婚者が好きではなかった。両親は式をあげることを迫っていた。気のすまない結婚をこのさい一刀両断に解決するには、桑子にこちらに出向いてもらうより方法がないというのだった。その手紙には名古屋駅で近鉄にのりかえて、四日市から湯の山行電車のればよいと書かれていた。

「桑子という女をみせて、こういう女が自分にはいるのだから、この結婚を思いあきらめてくれと、大友は切札に使うつもりだろう」

大友というとき、たか子にはにくしげに呼びすてた。二度とたか子の口から、さんづけでは呼ばれないであらう。大友武は、裏切りものであった。

「大友さんの困難な立場に私が何かのお役に立つなら、菰野までいってもよいと思います」

と、桑子は姉から水尾に視線を移した。

「大友君は気が弱い。強引に自分を主張することの出来ない人間だ。それが唯一の欠点だ。相手が強く出ると、いやいやながらも屈服してしまう。金持の長男に生れているのだから、もっとわがままであつていいのだが、齒痒いようなところがある。柄は大きいが、度胸がないんだね」

たか子が、結論を叩きつけた。

「いきたければ、いったってかまわないよ。その代りこちらに関係ないことだからね。何もしてやらないよ。そんな義務もないからね」

桑子は頭を下げると、台所にひきさがった。結婚生活の経験のある、三十六歳のお菊は、話をきいていた。だまつて、うなずいて迎えた。

「私、やっぱりいつてくるわ」

「いつてらっしゃい。気のすむようにいつてらっしゃい」この家では、唯ひとりのお菊の桑子の同情者であった。

「お姉さん、汽車賃を出さないつもりだわ」

「すこしぐらいなら、私がおたてかえます。こっそり旦那さまにおたのみにするといひです」

「お姉さん、泥棒に追銭の気持なんでしょう」

「まさか」

笑ったが、お菊は首をすくめて、同意をしめた。お菊は水尾が会社に出るのを玄関に見送ったが、台所にひきかえすと、裏口から走り出した。

「駅のところでは旦那さまに追いつきました」

と、千円札を何枚か桑子に手渡した。

「旦那さまは桑子さんの同情者なんですけど、奥さまの手前、大つぱらにふるまうわけにいかないですよ」

義兄が自分の同情者とは思っていなかった。金を出したのは、水尾家の体面を重んじるからであった。桑子に同情するのは、妻を裏切ることになった。それは、水尾には出来ない芸当であった。お菊にいわれて、水尾は金を出した。お菊の手前、水尾家の体面を保ったのだ。自分から進んで体面を保とうとはしない。桑子は昔から、義兄は姉と

ひとつ穴のむじなと思っていた。最近はとくにその傾向が強くなった。水尾家という家庭は、桑子と関係がないのである。水尾家は水尾祐正とたか子の二人だけのものではあった。そのやり方があまりに露骨であった。

お菊からも金を借りて、桑子は東京駅に来ると、いきあたりばったりの列車に乗った。四日市駅の待合室で立往生しなければならぬのも、自分がえらんだ結果であった。桑子はトランクに両肘をついて、頭を垂れ、目をつむった。眠気はすこしも感じなかった。これからのことを想った。こういう問題は、世間の事情に通じたひとが采配をふるべきであった。二十一歳の、経験の足りない、たよりない娘がのりこむ筋合ではなかった。しかし、桑子は大友の手紙を無視することが出来なかった。むづかしい立場におかれている大友を、気の毒に思った。自分に大友を救う力があるような気がした。しかし、どうすればよいのか、それはわからなかった。二十一歳の存在を、菰野という知らない土地へ持っていくだけのことであった。

「あんた、こんなところで夜を明かすつもりやな」と、頭の上で男の声がした。四日市なまりであった。

びっくりしたふうもなく、桑子は自分の前に立っているひとの顔を見あげた。知らない顔であった。がすぐ、電車の中のとりの五十男であると気がついた。桑子は安心したように、にやりと口もとをゆがめた。

「こんなところで若い女が夜を明かしたら、ろくなことが

あらへん。おまわりさんにとがめられるわ。もう何か訊かれたんとちがうか」

まる出しの四日市弁に、桑子は面くらった。電車の中では標準語を使っていた。

「どこへいきなさる？」

「菰野へまいります」

「湯の山行は、明日の朝でないと出えへんわ。むちゃや、こんなところで若い女がひとり夜を明かそうなんて……」
「宿屋がどこにあるか知りませんし、四日市には知合もありませんので……」

「わしについておいなはれ。悪いようにはせえへんわ」と、五十男が待合室の出口に向けて歩きかけた。桑子は立ち上った。男は桑子が待合室で夜を明かそうとした向うみずを、怒っているようであった。悪意のあるひととは思われなかった。

「桑子はここが足りないから」と、姉のたか子は頭を指して、「かんとんにひとにだまされてしまう。ひとのいうことを、すぐ信じてしまうんだから。疑ってかかるということを知らない子だよ」

口答えは出来ず、そういうわれても桑子はにやにやしているだけだが、自分がひとより劣っているとは思わなかった。学校の成績も、いつも上の部であった。姉は妹を劣等児扱いにしたいのだった。姉はそうすることを一種の愛情と勘違いしているようであった。

「うちは、お諏訪さんの裏で小さい旅館をやっとる。ちょ

うど一ト部屋あいてた。いっぺんうちにええったんやけど、妙にあんたのことが気にかかって、ようすを見に来たんや。そしたら案の定、待合室で夜を明かすつものあんたを見たんや」

お諏訪さんというのは、諏訪神社のことであつた。桑子は姉の毒舌も思い出さなかつた。桑子は五十男を、親切なひとだと思つた。ふたりは、夜更けの町を歩いた。

「すぐそこや」

五、六分も歩いたであらうか、行先に旅館梅屋と書いた小さい電燈が見えた。しもたやの多いところのようであつた。

「幸いうちが旅館をやつてたから、ええようなものの、しもたややつたら、あんたに声をかけることも出来なかつたやろな」

平家建の旅館であつた。玄関先に箱庭のような植込みがあつた。玄関からまっすぐ奥に廊下がのびていた。建物は新しいが、金をかけた建築とは思えなかつた。

「玄関に近うて、うるさいけど、この部屋だけがあいてたんや」

玄関を上つてすぐ右手の部屋であつた。二畳のひかえの間と、奥が六畳になつていた。男は桑子を床をうしろに坐らせると、

「いま着がえを持たせてくるから、お風呂にはいんなはれ」

「ありがとうございます」

小さい座卓をへだてて、桑子は格好がとれないので困つた。

「うちはこれでも旅館や。風呂ぐらいいつでもわいとる。

遠慮はいらんわ」

伯父がひさしぶりに会つた姪に世話をやく調子であつた。

「おなか、へつとらへんか」

「弁当を食べました」

「夕方に食べたんやろ。そんならおなかすいとるはずや。遠慮せんでもええ。何が好きや。うどんはきらいか」

うどんときいて、桑子は、なんということなく微笑した。東京のひとつなら、そばというところであらうと思つた。

「いいえ、結構ですわ」

女中が声をかけて、お茶と茶菓子をはこんできた。かなりの年配の女中であつた。

「あんたはお客さんやないわ。梅屋のお客さんやない。わしは、客引きしたんやない。あんたはわしの知合や。気をらくにもつてえな。汽車で疲れとるんやろ。ひとり旅で緊張とるからな。すぐ寝どこをとらずで。ぐっすり眠るとええわ」

「いろいろお世話になります」

と、桑子は頭を下げた。

「孤野へいくとうったな」

「はい」

「わしも菰野のことなら、すこしは知つとるのや。わしの生れは、菰野に近い水沢や。水沢というても、知らんやろけど、菰野の近くや。そいで菰野のことも知つとる。あんた菰野のどこへいくのや」

「菰野の太友さんというお宅ですわ」

「太友さんか。知つとる、知つとる。太友さんいうたら、町長さんにも二、三度なつたお方や。あんた太友さんの知合か」

「そこに武さんという方がいらつしやるでしょう？」

「東京の大学へいつとつた武さんやな。武さんのことも、よう知つとる」

と、旅館の主人は腕時計を見た。

「もうこの時間では、電話もおそい。田舎は夜が早いから、いまごろ電話をかけては、すまんことや。明日の朝はやく電話をかけよう。あんた、武さんの知合やつたのか」
桑子はうなずいてみせたが、知合をどんなふうに解釈されるか、不安になった。主人は桑子の存在がすこしずつ判りかけてくると、いまさらに若い女の服装に目をおくるのだった。何ものとも、主人には見当がつかないふうであった。水商売の女にしては、野暮^{のろ}たい身なりであった。うすく口紅をつけているだけで、素顔のままといつてもよかつた。

客扱いが職業なので、旅館の主人にはひと目見て、客の

素性は大体の見当がつけられた。お茶をすすめると、若い女はすなおにお茶をとりあげた。柄が大きいので、二十三、四にも見えるが、二十そこそこではないのか。その顔立に、まだ一人前になつていない硬さがあった。鼻や唇や眼が、一人前の線に固まつていなかった。美貌といつてもよいのだが、美貌となる約束を感じさせる顔といった方が適切^{ひとみ}であった。が、瞳^{ひとみ}がきれいであった。そして、何となく気稟^{きりやう}が感じられた。

「あんたひとりで、太友さんを訪ねていくのやな」

「はい、武さんからは是非来てほしいと手紙が来ましたので、四日市駅で立往生になるとも知らずに来てしまいましたの」と、桑子は自分のおるかさを笑うように苦笑した。

「あんたひとりなんやな」

「はい、ひとりです」

「うちのひとは、あんたがひとりで四日市に行くことを知つとるんやな」

「はい、知つてます」

主人には、ますます理解出来なくなるらしかった。が、若い女が嘘をついているとは思えなかった。

「そやけど、なんやおかしいな」

桑子は、苦笑をつづけた。主人に理解をあたえるには、水尾家における自分の位置から説明をしなければならなかつた。そんなことは出来ない。

「武さんが来いというたから、あんたは東京からひとりやって来たんやな」